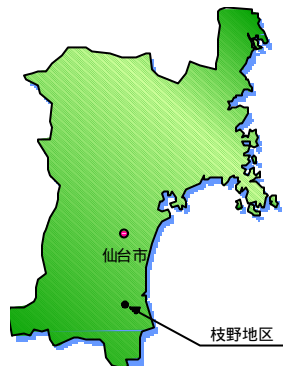


特集：おらほの農地集積

えだの 枝野地区

・地区の概要

事業名	ほ場整備事業（担い手育成型）	担い手農家	14戸
関係市町村名	角田市		1組織
関係土地改良区	角田隈東土地改良区、		
工期	平成10～18年度	担い手経営面積	
受益面積	211.3ha	実施前	36.2ha
総事業費	2,221百万円	H13年度	102.3ha
組合員数	385人	担い手農地	
		集積増加率	63.2% (H13)



・都市との交流が地域農業に新たな息吹を・・・



毎年5月になると、角田の農協青年部有志は稲の苗をたずさえて東京都目黒区内の小学校を訪れる。校庭の片隅に造られたミニ田んぼで、児童と一緒に田植えをするためだ。

都会の子ども達は泥んこになりながら自分の手で植えた苗を大切に育てている。その後も、7月には田んぼの手入れ、9月には稲刈りの手ほどきにと角田からせっせと東京に通っている。

こんな取り組みが角田市の農協青年部と東京都目黒区内の小学校の間で12年間も続けられている。きっかけは1990年、角田農協青年部が主催したアジアの農民シンポジウム（角田市で開催）に目黒区民が数多く参加し、そのお礼の意味をこめて、農協青年部が目黒区内にある22の小学校にササニシキの苗を届け、プランターを使って田植えの実演をしたのが交流の始まりだったそうだ。

米作りはなかなか好評で、プランターではなく本格的に栽培してみたいと、校庭に水田を造る小学校もでてきた。翌1991年からは田植えをしながら、稲の生育や米の大切さについて小学生と話し合いの場を持つようになり、今では目黒区から子どものみならず先生までもが農業体験に角田を訪れるようになった。12年前に始まった都会での米作りのデモンストレーションは思わぬ方向に進化した。

そんな中、“ほんまもの田んぼを見たい”という都会の子ども達の希望で、毎年夏休みに各小学校の代表が角田の農家にホームステイしながら田舎暮らしの体験学習が行われるようになった。一方、角田の子どもたちも目黒区に行って都会の生活を体験するようになった。こうして始まった都市と農村の交流は、閉鎖的といわれる農村社会に何やら新しい風を吹かせているようだ。

角田市枝野地区は、その昔（室町時代中期）に、今の東京都目黒区から目黒氏が移り住んだことから、角田市と目黒区は古くから友好の絆があったということです。



・枝野集団転作組合が大豆の新品種「あやこがね」を栽培

本年度、ほ場整備事業の基幹工種実施済み区域（H12年度まで）81.9haのうち56.1haを地区の担い手である枝野集団転作組合が農作業受託により大規模な大豆の転作を実施した。ほ場整備地区の担い手組織が約60haもの農地に大豆を作付けしたのは県内でもあまり類がないことだろう。

収穫した大豆は「JAみやぎ仙南」が全量買い取り、「JA直営」の納豆センターに運び納豆に加工、みやぎ生協を通じて消費者の手に届けられている。

角田市では毎年、約300haもの大豆が作付けされており、そのほとんどの品種が納豆に適した小粒の「コスズ」という品種だそうだ。しかも、以前から減農薬栽培（殺菌殺虫同時処理剤1回のみ）に取り組んでおり、専用の選別プラントと最新のコンピューター制御によるオンラインシステムにより、豆洗い、蒸煮、定量盛込み、適温調整などの作業が効率よく行われ、常に安定した品質の納豆が出荷されている。

しかし、枝野集団転作組合が今年度作付けした大豆の6割は角田の主力品種「コスズ」ではなく、宮城県が平成11年度から奨励品種に採用した「あやこがね」という新しい品種の大豆である。残念ながら2年ほど前から影響が大きいカ

メムシの被害を恐れ、減農薬栽培には取り組めなかったが作付け初年度にしてはまずまずの収量（150kg/10a）だったとか。「あやこがね」は大粒の大豆で味が良く、豆腐や味噌の加工に適しているということだ。その大豆を引き受けた「JAみやぎ仙南」では試験的に自前の加工場で納豆にし、1月に販売したところ、その味の良さと粒のデッカさが受けて大ブレイク。納豆センターの生産ラインもフル稼働の毎日が続いているという。

枝野集団転作組合は参加農家戸数13戸、内オペレーター数9人。設立と同時に担い手育成基盤整備関連流動化促進事業の大区画ほ場高度利用推進事業（機械リース）を活用し、大豆専用コンバインを導入。枝野地区の転作を一手に担っている農業生産組織だ。組織の財源は委託者からの作業料金と生産物（大豆、麦）の販売代金、それに角田市からの営農条件整備事業等の各種補助金で賄われている。また、必要以上の収益があった場合は、転作の委託農家にその利益の一部を還元している。もちろんそのときの作柄はいろいろだが、土地の出し手である委託農家にとっては悪い気はしない。ちなみに平成12年度は10aあたり2,000円を還付したという。

転作大豆の販売ルート確保に苦慮してる生産組織等が多いなか、また、農産物の地産地消が叫ばれているなか、なんともうらやましい限りだ。



・角田の農業はあしたもまじめです



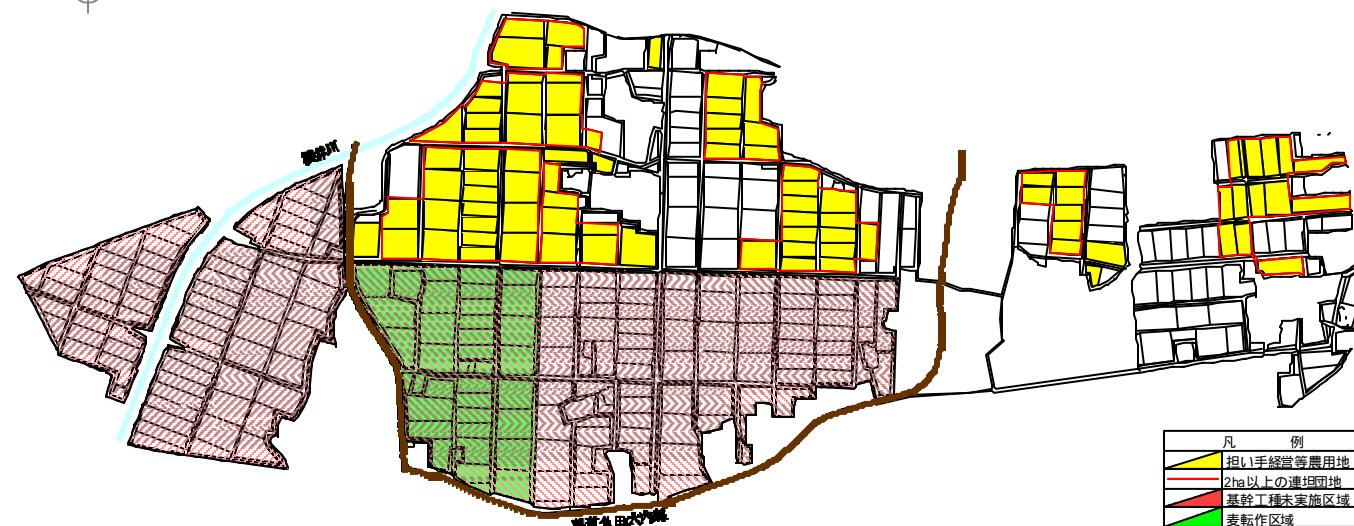
平成12年3月、角田市とみやぎ仙南農協がそれぞれ出資し、角田市農業振興公社（社団法人）を設立。会員は角田市、角田市農業委員会、みやぎ仙南農協、県南農業共済組合、角田土地改良区、角田隈東土地改良区、仙南中央森林組合の7団体と個人会員116名、組織会員13、特別会員78名で構成され、地域農業戦略の調査、研究に関する事業、シンクタンク機能に関する事業、農地保有合理化事業、農作業受委託推進事業、農業改善支援事業、新規就農者支援事業、農業人材育成に関する事業、農産物・地域特産物販売の調査、研究及び実験、実証に関する事業、都市消費者等交流事業など9つの主要な事業を角田農業戦略プラン（2000年2月、担い手農家の代表者等が作成。）に従って展開していく計画だ。

また、平成12年10月には農地保有合理化法人の資格を取得。関係機関がそれぞれに扱っていた農業経営の規模拡大、農地の利用集積や土地利用に関する相談、あっせん、調整の窓口を角田市農業振興公社に一本化して実施している。

枝野地区のほ場整備事業において、換地と農地の利用集積などの業務を直接担当している角田隈東土地改良区も角田市振興公社の会員として角田農業戦略プランの実現に向かって、関係機関とたえず連携をとりながら農地の利用調整を行っている。とにかく、角田の農業はあしたもまじめなのである。



平成13年度農地集積状況図（枝野地区）



- 問い合わせ先 -

〒981-1504 角田市枝野字畑中88-1
角田隈東土地改良区
TEL.0224-63-1001 FAX.0224-63-3337